

## 滋賀県教育委員会

【総人口】1,406,648人（令和5年5月1日現在）

【自治体 関連URL】 <http://www.pref.shiga.lg.jp/edu/school/kakusyuu/youzi/>

（令和5年5月1日現在）

【主担当部局】滋賀県教育委員会幼小中教育課  
（公立幼稚園・小学校担当）

【主な関係部局】滋賀県健康医療福祉部子ども・青少年局  
（保育所・認定こども園担当）  
滋賀県総務部私学・県立大学振興課  
（私立幼稚園担当）

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	1	101	19	61	142	40	84	1	218	0
園児・ 児童数	110	6,779	1,632	5,679	12,809	6,136	11,395	621	78,368	0

事業実施地域・ 協力園校	【実施地域】 彦根市城東小学校区
	【協力園校】 幼：公立幼稚園1園、公立保育所1園、私立保育所1園、私立幼保連携型認定こども園1園 小：公立小学校1校

架け橋期の カリキュラム開発 会議	【会議委員人数】 25名	【開催数】 3回
	【委員属性】 公立幼稚園長1名、公立保育所長1名、私立保育所主任1名、公立認定こども園長1名、公立小学校長・教頭2名、コーディネーター2名、小学校加配教員1名、小学校校内研究主任1名、小学校1年生担任1名、園5歳児担任4名、教職大学院教授1名、県公立幼稚園・小学校担当3名、県保育所・認定こども園担当2名、彦根市小学校担当者2名、彦根市幼児課2名	

架け橋期の コーディネーター等	【配置人数】 2名
	【経歴】 ・元保育園長 ・元公立小学校教諭

架け橋期の カリキュラム	【開発主体】 城東小学校区地区（1公立幼稚園、1私立保育所、1公立保育所、私立幼保連携型認定こども園1園、1公立小学校） 県学びに向かう力推進事業指定校区：4校区
-----------------	---

# 架け橋期のカリキュラム

視点	留意事項
開発プロセス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本県の幼保小接続の現状は、研究が終了すると継続しない、年度途中にカリキュラムを見直しにくいといった課題が見られ、取組が「点」に止まり「面」として広がりにつなげられなかった。また、公立幼稚園と認定こども園・保育所、私立幼稚園の所管課が三つに分かれており、幼児教育センターの設置はなく、カリキュラムを開発するための会議等も実施していない。そこで、3課局でプロジェクト会議を立ち上げ、カリキュラムの方向性を検討し、滋賀県版「架け橋期カリキュラム」枠を開発した。</li> <li>・県内で作成されているカリキュラムには、次のような課題があった。①5歳児後半から小学校1年生4月～5月までのカリキュラムであり、児童が“学校に慣れる”ことを目指しており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえてはいない。②書いてあることが細かすぎ、用語がわからない、園と小学校が別個で作成し、協働して策定できていない。</li> <li>・課題を踏まえ、滋賀県版「架け橋期カリキュラム」は、5歳児から1年生の2年間とした。また、園と小学校が期待する子ども像を共有し、そこに向けての大切にしたことを共通理解すること、そして、共通理解したことを実践し、振り返るという持続的・発展的な幼保小接続を支えていくものとした。</li> <li>・県としては、滋賀県版「架け橋期カリキュラム」を開発し、方向性を示すが、あくまでもその中身については、校区の実態に応じたものを検討し、園と小学校が自分ごととして幼保小接続を進めることを大事にしている。</li> </ul>
架け橋期カリキュラムの概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滋賀県版「架け橋期カリキュラム」は、園と小学校が協働で作成する「共通シート」と「実践記録」の2枚のシートで構成されている。「共通シート」には、大きく三つの視点を設けている。共通の視点は、①期待する子ども像、②期待する子ども像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、③期待する子ども像に迫るために大切にしたいことである。園と小学校が共通の視点を理解したうえで、互いに実践し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が見られた子どもの学びの姿を「実践記録」に描き出す。「共通シート」には、実践を振り返るための「振り返り枠」を設けている。また、「実践記録」には、他園や小学校からのコメントを記載する「コメント枠」や「振り返り枠」（※下図赤囲み）を設けており、実践を振り返ったり、カリキュラムを改善したりするAARサイクル（※）を生み出すことを意図している。 ※ AARサイクル（Anticipation：見直しをもつ、Action：やってみる、Reflection、Reconstruction：実践の振り返りを踏まえたデザインの見直し・再構成）</li> </ul>

## 滋賀県のカリキュラムの課題と解決策

▲“小学校に慣れる”ためのカリキュラムになっている。

▲書いてあることが細かすぎ、用語がわからない、互いのカリキュラムを見るだけになっている。

▲園と小が別個で策定しており、協働して作成していない。

▲担当者が変わると継続しない。  
▲年度の途中で見直すことはほぼない。  
▲複数校園が集まる時間が取れない。

▲そもそも何を手掛かりにカリキュラムの策定をすればよいかわからない。

**5歳児から1年生の2年間の枠**

**園と小が協働で策定する枠**

- 期待する子ども像から、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を見出し、**取組を焦点化**。
- 校園の期待する子ども像や、共通の視点を1枚シートで作成することで**協議する必然性**。

**持続可能な体制の構築**

- 実践やコメントを書き込むことで実践を**AARサイクル**で見直せるカリキュラム枠。
- 子どもの姿から**検証・改善する枠**。

**カリキュラム作成の手掛かりとなるものを作成**

- 0歳～7歳までの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における**発達や学びのプロセスおよび共通の視点**を示す。

滋賀県版「架け橋期カリキュラム」枠開発

【滋賀県版「架け橋期カリキュラム」枠】

「共通シート」

三つの視点を園と小学校が協働で策定

- ①期待する子ども像
- ②期待する子ども像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
- ③期待する子ども像に迫るために大切にしたいこと

「実践記録」

園と小学校が共通の視点を理解したうえで、実践し、子どもの学びの姿を描き出す。

The image shows a screenshot of the curriculum framework. It consists of two main parts: '共通シート' (Common Sheet) and '実践記録' (Practice Record).

**共通シート (Common Sheet):** A table with columns for '5歳児' (5-year-olds) and '第1学年' (1st grade), and rows for '期待する子ども像' (Expected child image), '幼児期の終わりまでに育ってほしい姿' (Desired child image at the end of early childhood), and '大切にしたいこと' (Things to cherish). The table is divided into 'Anticipation' (見直しをもつ) and 'Reconstruction' (実践の振り返りを踏まえたデザインの見直し・再構成) sections. A red box highlights the 'Reconstruction' section.

**実践記録 (Practice Record):** A form for recording the process. It includes a section for '子どもの学びの姿を描き出す' (Recording the child's learning posture) and a cycle of 'Action やってみる' (Action: try it), 'Reflection ふりかえる' (Reflection: reflect), and 'Action やってみる' (Action: try it). A red box highlights the 'Reflection' section.







# 架け橋期のカリキュラム

視点	留意事項
架け橋期のカリキュラムの実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>園と小学校が共通の視点をもって、保育・授業実践をする。</li> <li>保育・授業の中で見られた子どもの学びの姿を「実践記録」に描きだす。校園が持ち寄る「実践記録」は、「何をしてきたか」という活動内容ではなく、「どのような姿だったか」という子どもの姿を描き出すことを意識する。</li> <li>研究2年目は、研究1年目の「実践記録」をもとに、保育・授業をデザインし、実践し、振り返るというAARサイクルをより促進させるために、「滋賀県版学びのサイクルデザインシート」（通称：ぐるぐるシート）を開発。</li> <li>子どもを主体にした保育・授業実践に資することができるよう、本シートを活用いただき、保育・授業構想の手掛かりとしている。</li> </ul>

## 【研究1年目実践記録】

		5歳児
時期		9・10・11・12
期待する子ども像		
最後までいってほしい姿	心自立	考えたり工夫したり、失敗したりを繰り返しながら、自分なりに最後までやってみようとする。
幼児期の終わってほしい姿	えの思考力	お互いの思いや考えを伝えたり聞いたりしながら、もっと楽しくしようと工夫するようになる。
幼児期の終わりにまで子どもの学びの姿		<p>○運動会 ・運動会の練習に向けて、自分で活動の服装や集合場所、時間を確認して行動することができた。 ・組体操の活動では、自分達でどのように取り組んでいきたいかということを考えて話し合い、「そら」をテーマにすることになった。「浮いている飛行機」「プロペラが回るヘリコプター」「きらきらひかる星」など、子どもたちから出てきた発想をみんなが共有し、それを具体的に手を広げたり腰をかがめたり回ったりする身体の動きで表現していた。</p> <p>・例えば、「プロペラが回るヘリ」では、回る回数や方向、速さなどについて、どうするのが良いか、子どもたちが考えを出し合った。最終的には6回右回りで回って、最後はガソリンが減るのでゆっくり、回って止まり、バッテリーがなくなると示すのにジャンプしようということになった。このように本番まで子どもが考えを出し合い、動きを修正しながら完成につなげ、本番も生き生きとした表情で楽しみ、自信をもって表現することができた。</p>
		
	他園・小学校からのコメント	

## 【研究2年目】

### ○「滋賀県版学びのサイクルデザインシート」（通称：ぐるぐるシート）の開発



AARサイクルで保育・授業改善

子どもの学びは、日々の遊びや活動の中で、子どもが心を動かし、主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わい、また心を動かすという学びが展開していくことを通して、繋がり深まっていくものである。子ども想いや活動がどのように展開していくのか予想することで、子どもを主体にした保育・授業実践に資することができるよう、本シートを活用いただき保育・授業の手掛かりとしていただいている。

「滋賀県版学びのサイクルデザインシート」

【ぐるぐるシートを使った先生方の声】

- ・これはとてもよい。子どもの思考の流れがとてもわかりやすい。
- ・視覚的に誰が見てもわかりやすい。他の先生と子どもの様子を共有できる。保育案の代わりに活用しているが、保育案を書くよりもよい。
- ・子どもの気持ちを考えながら吹き出しを考えるのがおもしろい。予想した姿がでてきたら「やった！」と思う。
- ・担任の子どもの発達の見取りが変わった。先生の力がついた。

## 架け橋期のカリキュラム

視点	留意事項
架け橋期のカリキュラムの実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「架け橋期カリキュラム」共通シートで共通理解したことをもとに実践。</li> <li>・期待する子ども像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」自立心、思考力の芽生えを意識。</li> <li>・参観後の協議は、保育・授業における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について協議。</li> </ul>

### 【架け橋期のカリキュラムの実践】



- 「園ではどうだった？」「次はどうしたらいいと思う？」の声かけを意識。
- 教師が答えをすぐに伝えるのではなく、子どもが考えることを意識。
- 身の回りのことは、子ども自身で解決できるよう仕組む。
- 昨年度の学校探検は、これまで教師が先導し、並んで探検していたが、今年度は、子どもが行きたい場所へ自由に探検するスタイルに変更。その結果、子どもが心を動かし、主体的に活動に向き合う姿となった。



- 他の園で泡遊びを参観した。泡遊びは自園にない環境であり、職員からぜひ取り入れたいと声があがり、早速取り入れた。
- 外遊びが乏しいと思ったので、園の環境をどのようにするのかみんなで考えた。
- 3・4・5歳児の担任が共に環境を構成したり、保育を相談し合ったりする姿になった。
- 子どもが考えるということを大切にすると、教師は待つ姿勢となった。
- より主体性を意識し、子どもの声、自立心、思考力の芽生えをより意識するようになった。

### 【参観後の協議】



- 施設類型の違いにより、一見すると自分たちの保育と比べて、育ちの読み取りを見失いがちだったが、校園間の参観を重ねることで、保育や授業の子どもの姿から、育ちを読み取る力がついてきた。

## 次年度への展望

視点	留意事項
成果と課題、及び展望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滋賀県版「架け橋期のカリキュラム」や「滋賀県版学びのサイクルデザインシート」を活用することで、持続的・発展的な幼保小接続の仕組みを整えることができた。</li> <li>・幼保小接続の取組を通して、互いの保育・教育の理解につながり、そのことが、自園・自校の取組を問い直すこととなった。</li> <li>・保育・授業が変わりつつあるが、子どもの学びや育ちは、今後も継続してつないでいくことが大切である。</li> <li>・モデル校園の取組を市全体に広げるとともに、全県へ普及・啓発する必要がある。</li> <li>・令和6年度は、さらに保育・授業改善に努めるとともに、家庭や地域と連携した取組にすることで、子どもを真ん中に全ての大人が関わる幼保小接続を目指していきたい。</li> </ul>